

民族舞踊の教材活用の可能性を探る 2

—家庭分野「衣文化」の体験として

弓削田 綾乃 (和洋女子大学)

1. 研究の背景と目的

本研究は、民族舞踊のアプローチの一つとして、家庭分野での活用を検討する。第 73 回大会では中学校家庭分野の教科書を分析し、衣文化の単元での親和性を指摘した。たとえば「浴衣」の単元では着装体験が推奨されており、着付けのデジタルコンテンツが掲載されていたものの、着装状態での活動に関する解説はなかった。評価ポイントが「着用を通して和服の特徴を理解できたか」であることから、着装中の体験が重要と考えられた。これを受けて本研究では、浴衣の着装体験の一つとして、盆踊りの実践を試みた。

2. 研究の対象と方法

2022 年 9 月に、千葉県 C 市立 M 中学校 2 年生 4 クラスを対象に授業を実践した。その概要は次の通りである。科目：家庭、時間：1 時間 40 分 (2 時限分)、場所：武道場、ねらい：浴衣を着装して諸活動を行い洋服との違いを理解する。手順は、①浴衣に関する経験やイメージ等を問う事前アンケート、②帯の結び方の動画を視聴しながら浴衣を着る、③活動実験 1 (着座、歩く・走る、段差・ものを拾う等)、④活動実験 2 (盆踊り)、⑤浴衣を脱ぎ、動画を視聴しながらたたむ、⑥気づいたことや感想等を問う事後アンケートとした。

アンケートの回答はタブレットで行い、クラウド上で集計した。帯の結び方の動画は、教員免許取得見込みの W 女子大学 4 年生らが作成したものである。

盆踊りは、「活動体験 2」で実施した。時間は 15 分程度で、曲は炭坑節とした。まず、炭坑節の由来を説明し、その由来が踊りの所作に関連していることを体感できるよう進めた。最後は全員で輪になり、1 曲 (約 3 分間) を踊った。

3. 結果および考察

3-1. 活動実験 1—日常動作の体験

和服での「歩き方」がわかっている人の割合は事前 7%、事後 26%で、「座り方」は事前 6%、事後 32%、「手の挙げ方」は事前 3%、事後 42%だった。いずれも活動実験後に増加したものの、事後も「わからない」人が半数以上いた理由として、課題を実践し、各自で気づきを振り返る流れだった点が考えられ、何らかの補足が必要と思われた。

3-2. 活動実験 2—盆踊りの体験

盆踊り体験後、「動かしにくい身体の部分」への回答として、多い順に「足」(60.4%)、「腕」(26.4%)、「腰」(24.5%)であり、「なし」(26.4%)もいた。「着崩れた部分」は、「えり元」「足元」(ともに 39.6%)、「なし」(28.3%)、「帯」(22.6%)という順だった。和服で想定される動き方は、普段のものとは異なり、それが着崩れにつながるという気づきを促す体験だったと考える。

「日本独特の動き方を感じたか」には、94%が「思う」と答えた。40%以上が選んだ項目は、「浴衣にあった動き方」(62.3%)、「振付がやさしい」(47.2%)、「リズムにのる」(43.4%)、「普段と違う身体の使い方」(41.5%)だった。自由記述では、「やさしいリズム」「動きが制限される中でも、うまく体を使ってリズムにのって踊れた」「浴衣の特徴を感じた」「浴衣を崩さないように踊るのは難しい」などがあった。また「みんなで楽しく踊れた」という回答もあり、盆踊りによって踊る楽しさを味わいつつ、和服の学びを深められたと考える。

3-3. 家庭分野「衣文化」の教材として

自由記述には「日本の伝統文化を感じた」「盆踊りの歴史がわかった」などがあり、文化の学びにもつながっていたことがうかがえた。限られた時間で和服の特性を理解するために、着装状態で日常動作を試みることに加えて、比較的易しい所作で構成される舞踊の体験が有効であると考察する。それは、衣文化に関連した様々な事象への関心を広げる機会としても位置付けられると考える。